

中学生の登校回避感情とソーシャルサポートに関する検討

広島国際大学総合人間科学研究科 広島国際大学人間環境学部 北九州市立大学文学部
木原 律 三浦 正江 田中 信利

The Examination of the Feelings of School Non-Attendance and Social Support in junior high school students

Ritsu Kihara*, Masae Miura**, Nobutoshi Tanaka***

* Integrated Human Sciences Studies, Hiroshima International University

** Faculty of Human and Sosial Enviroment, Hiroshima International University

*** Faculty of Humanities, The University of Kitakyusyu

本研究では中学生を対象に質問紙調査を行い、登校回避感情とソーシャルサポートとの関連を検討した。登校回避感情は因子分析の結果、「友人関係における孤立感傾向」、「学校からの離脱感傾向」、「学校に対する疎隔感傾向」の3因子にわかれた。ソーシャルサポートはサポート源とサポート種類の組み合わせから「家族からの心理的サポート」、「家族からの物理的サポート」、「友人からの心理的サポート」、「友人からの物理的サポート」にわけ、登校回避感情とサポートの相関関係を明らかにした。その結果、「友人関係における孤立感傾向」と全てのサポート、「学校からの離脱感傾向」と「家族からの心理的サポート」、「学校に対する疎隔感傾向」と「家族からの心理的サポート」、「友人からの心理的サポート」との間に有意な負の相関関係が見られた。以上から、中学生では親からのサポートの重要性が示唆された。また、物理的サポートよりも心理的サポートの方が登校回避感情との関連があることが明らかにされた。

Key words: 中学生, 登校回避感情, ソーシャルサポート

問題と目的

近年、小中学校における不登校に対する対策が模索されつつある。しかし不登校児童・生徒の数は依然として増加の一途をたどっている。森田(1991)は、欠席行動までには至らなくとも「学校へ来るのが嫌だ」という意識(登校回避感情)を抱える生徒を“不登校のグレイゾーン”と呼び、不登校問題の裾野の広がりを示唆した。不登校児童・生徒が増加する中で、この登校回避感情を抱える子どももまた増加していると考えられる。中学生の登校を巡る意識の調査(本間, 2000)では、登校回避願望を欠席願望、早退願望、遅

刻願望の3項目で測定し、1992年度と1998年度の結果を比較している。その結果、どの項目においても1998年度の方が高かった。

これまで、不登校をはじめとした学校不適応は主に子ども自身の問題として捉えられてきた。そのため、臨床心理学的観点からその原因や治療過程を見いだそうと多大な努力が払われてきた。ところが最近になって、学校不適応は特定の子どもにだけ生じる問題ではなく、誰もが日常の学校生活で感じる「学校ストレス」がその原因の一つであるという考え方が受け入れられるようになってきた(岡安, 1994)。これは、子どもたちが日々の学校生活において感じる様々な学校

ストレスラーが無気力や抑うつ・不安といったストレス反応を引き起こし、さらには学校不適応状態に陥るという考えに基づいている。しかし同様のストレスラーを経験してもストレス反応の表出の程度は生徒によって異なる。この個人差を説明する代表的なストレス緩衝要因の一つとして、ソーシャルサポートがあげられる(Cohen&Wills, 1985)。

ソーシャルサポートとは、Caplan (1974) によって概念化されたもので、「ある個人を取り巻く様々な人からの有形・無形の援助」を指す。その後、様々な立場から多くの研究者によって定義づけられてきたが、概して「他者との間の社会的支援関係のこと」といえる。嶋(1992)は大学生を対象に、ソーシャルサポートと日常生活ストレスとの関連を検討している。サポート源として家族、同性の友人、異性の友人の3種類を設定し、実存的、対人、大学・学業、物理的の4種類のストレスと心理的健康との関係を調べた結果、性別によって差があるものの、サポートのストレス緩衝効果を示唆された。

また中学生を対象とした研究もなされている。岡安・嶋田・坂野(1993)は学校ストレス尺度、ストレス反応尺度およびソーシャルサポート尺度を用いて、ソーシャルサポートのストレス軽減効果を明らかにしている。その結果は性別による特徴の違いが認められ、女子では母親サポートへの期待は強いが実際の軽減効果は父親サポートの方が有効であり、友だちサポートに関してはその期待の高さに反して軽減効果は有効でないことが示唆された。一方、男子では全体的にソーシャルサポートがストレスの軽減には有効でないことが明らかにされた。

また、不登校とソーシャルサポートの関係を取り上げた研究もいくつか見受けられる。西野・色川(1998)は、子どもたちを学校に結びつける力である「登校規定要因」とソーシャルサポートの関係を明らかにした。その結果、家庭や学校におけるサポート入手期待が高い群は低い群に比べて、学校の様々な活動に意欲的に取り組んでいることがわかった。

一方、不登校の問題を学校ストレスに対するストレス反応であると捉え、登校児と不登校児のソーシャルサポートの認知量を比較した研究(渡辺・蒲田,

1999)では登校児は不登校児よりも多くのサポートを得ていると認知していることが示されている。さらに、登校回避感情とソーシャルサポート満足度について調べた研究(渡辺・小石, 2000)では、ソーシャルサポート満足度が高い生徒は登校回避感情が低いことが明らかにされている。

これらの研究では、ソーシャルサポートの測定に久田・箕口・千田(1989)が作成した学生用SESS(The Scale Of Expectancy For Social Support)を用いているものがほとんどである。大学生を対象にした学生用SESSは、5つのサポート源(父親、母親、きょうだい、いま通っている学校の先生、友だち)別に将来どの程度援助を期待できるかを問うものである。また、その一部を改変して中学生用SESS(岡安ら, 1993)も作成されている。SESSは1因子構造であることが確認されており、サポートの機能の区別はない。サポートの機能については、嶋(1991)が心理的サポート、娯楽関連のサポート、道具手段的サポート、問題解決志向的サポートの4つ、森・堀野(1992)が情緒的サポート、情報的サポート、実際のサポートの3つをあげているが、研究者の間で統一した見解は得られていない。しかし、大きく道具的サポートと情緒的サポートの2種類に分類できるという考え方が一般的である(浦, 1992)。

これまでの中学生を対象とした研究では、主に誰からのサポートかということに焦点が当てられ、どのようなサポートかという機能の点はほとんど取り上げられてこなかった。しかし、不登校の予防措置としてソーシャルサポートの学校ストレス低減効果を考える場合、誰からのどのようなサポートが有効なのかを検討することは、実際の介入場面で役立つと考えられる。

そこで本研究では、中学生の登校回避感情を学校ストレスに対するストレス反応と捉え、誰からのどのようなサポートと関連しているのかを明らかにすることを目的とする。また、ソーシャルサポートに対する認識は性別や学年によって異なる可能性がある。そのため、登校回避感情とソーシャルサポートの学年差、性差についても合わせて調べることとする。

方 法

1. 対象者：K市の公立中学校の1, 2, 3年生計198名。分析に際して、1項目でも欠損項目があったものを除外した。その結果最終的に分析に用いられたのは182名（1年生男子28名、女子21名、2年生男子32名、女子27名、3年生男子46名、女子28名）であった。

2. 調査内容：質問紙は(1)登校回避感情、および(2)ソーシャルサポートに関する測定尺度で構成された。

(1) 登校回避感情

渡辺・小石(2000)が作成した尺度を用いた。この尺度は「学校への反発感傾向」、「友人関係における孤立感傾向」、「登校嫌悪感傾向」の3下位尺度26項目からなるものである。本研究では登校回避感情の背後にあるのは、学校に対する強い反発感や嫌悪感ではなく、多くの生徒が経験する、より一般的な感情であると想定した。そのため、まず渡辺・小石(2000)の尺度から、調査実施を依頼した中学校教師の意見を参考に、強い反発感(例：学校に対して反発を感じる)や嫌悪感(例：学校ではいやなことばかりあると思う)を表現する10項目を削除した。さらに下位尺度ごとに因子負荷量が.40以上の項目を選び、再度、中学校教師にチェックしてもらった。そして、よく似た表現を削除したり、分かりにくい表現について一部変更を行い、最終的に計11項目を登校回避感情を測定するための項目とした。なお回答はすべて「あてはまる」

(5点)、「ややあてはまる」(4点)、「どちらともいえない」(3点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「全然あてはまらない」(1点)の5件法で求めた。

(2) ソーシャルサポート

嶋(1994)が作成した尺度を用いた。これは嶋(1991)が大学生を対象に行った研究で用いた項目を、高校生を対象にした研究の実施に際して一部修正したものである。嶋はこの測定内容を「利用可能であると知覚される主観的サポート」であると述べている。この尺度は情緒的サポート、情動的サポート、道具的・手段的サポート、ソーシャル・コンパニオンシップの4種類の内容を含んだ12項目からなるものである。しかし、嶋(1994)の因子分析結果では想定された4因子ではなく、心理的サポート、および物理的サポートと解釈できる2因子が抽出されている。そのため、それぞれの因子から因子負荷量の高い項目を選び、登校回避感情の項目と同様の手続きを経て整理された5項目をソーシャルサポートを測るための項目とした(Table 1)。また、サポート源については中学生の生活の実状や先行研究(嶋, 1992; 福岡・橋本, 1995; 嶋田, 1996)の分類に従い、家族と友人の2種類を設定した。回答は各サポート源との間に各項目の内容のような関係がどのくらいあるかを「非常によくある」(5点)、「かなりある」(4点)、「すこしある」(3点)、「あまりない」(2点)、「全くない」(1点)の5件法で求めた。

3. 手続き：クラスごとに担任によって実施、回収された。

Table 1 ソーシャルサポート尺度項目

項 目	機 能
家族サポート項目	
1. 友達とけんかをしたことについて話ができる	心理的
2. うれしいときや悲しいとき、気持ちをわかってもらえる	心理的
3. どうしても必要なとき、おこずかいとは別にお金をもらうことができる	物理的
4. 悩みごとについて話をする事ができる	心理的
5. プレゼントをもらったりすることがある	物理的
友人サポート項目	
1. 家族とけんかをしたことについて話ができる	心理的
2. うれしいときや悲しいとき、気持ちをわかってもらえる	心理的
3. どうしても必要なときに、お金や物を貸してもらえる	物理的
4. 悩みごとについて話をする事ができる	心理的
5. プレゼントをもらったりすることがある	物理的

4. 調査時期：2001年12月初旬

結 果

1. 登校回避感情尺度の因子構造

登校回避感情尺度について、渡辺・小石(2000)の作成した尺度から項目を抜粋し、一部表現の修正を行って用いた。そこで、因子構造を確認するため、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った(Table 2)。その結果、渡辺・小石(2000)とは異なる3因子が抽出された。

第1因子は「友だちと一緒にいると楽しい」(逆転項目)、「親しい友だちがいる」(逆転項目)、「友だちと一緒にいるより1人の方がらくちんだと思うことがある」などの項目からなり、友だちが少なく、友人関係に対して肯定的な意味を見出していない内容である。また渡辺・小石(2000)の「友人関係における孤立感傾向因子」に含まれる項目とほぼ同じ項目で構成されている。そこで「友人関係における孤立感傾向因子」と命名した。

第2因子には「ときどき学校に行きたくないと思う」、「学校さえなかったら毎日が楽しいだろうと思

う」、「学校の授業は時間のむだだと思ふことがある」などの項目が含まれている。登校に対して否定的な感情を抱いており、学校自体にあまり価値を見出していない内容と考えられるため、「学校からの離脱感傾向因子」と解釈可能である。

また、第3因子は「学校の先生に対して親しみを感ずる」(逆転項目)、「先生には安心して何でも相談できる」(逆転項目)、「この学校に対して親しみを感ずる」(逆転項目)の3項目から構成されている。項目内容は、学校や先生に対して親近感を抱いておらず、隔たりを感じているものと考えられるため、「学校に対する疎隔感傾向因子」と命名した。

なお尺度全体における信頼性係数(α 係数)は.78であり、一応の内的整合性が認められた。各下位尺度ごとの信頼性係数も.72~.81であり、内的整合性は保たれているといえる。

2. 登校回避感情、およびソーシャルサポートの学年・性別による違い

(1) 登校回避感情

まず、本研究の因子分析結果に基づいて、登校回避感情尺度の因子得点を算出し、それぞれ「友人関係に

Table 2 登校回避感情の因子分析結果

	I	II	III	共通性
I. 友人関係における孤立感傾向 ($\alpha=.72$)				
友だちと一緒にいると楽しい ※	.82	.08	.11	.69
親しい友だちがいる ※	.73	.00	.29	.70
勉強以外のことを友だちとよく話す ※	.56	-.19	.15	.38
友達と一緒にいるより1人の方がらくちんだと思うことがある	.49	.24	-.02	.30
II. 学校からの離脱感傾向 ($\alpha=.74$)				
ときどき学校に行きたくないと思うことがある	.06	.71	.20	.55
学校さえなかったら、毎日が楽しいだろうと思う	.11	.70	0.16	.53
授業が終わったらすぐに家に帰りたいと思うことがある	-.14	.66	.10	.46
学校の授業は時間のむだだと思ふことがある	.10	.45	.26	.28
III. 学校に対する疎隔感傾向 ($\alpha=.81$)				
学校の先生に対して親しみを感ずる ※	.07	.18	.87	.79
先生には安心して何でも相談できる ※	.17	.21	.68	.53
この学校に対して親しみを感ずる ※	.27	.28	.61	.52
固有値	3.65	2.14	1.26	
寄与率 (%)	18.04	17.17	16.76	

※……逆転項目

おける孤立感傾向得点」, 「学校からの離脱感傾向得点」, 「学校に対する疎隔感傾向得点」とした。

そして, 登校回避感情の学年差, 性差を調べるために, 下位尺度ごとに学年, 性を要因とする分散分析を行った (Table 3)。その結果, 学校からの「離脱感傾向」因子において学年の主効果が認められた ($p<.01$)。LSD 法による多重比較の結果, 3 年生よりも 1, 2 年生の得点が高かった。なお, 有意な交互作用および性の主効果は得られなかった。

(2) ソーシャルサポート

ソーシャルサポート尺度については, サポート源とサポート種類の組み合わせから項目の合計得点を算出し, それぞれ「家族からの心理的サポート得点」(得点範囲は 3 点~15 点), 「家族からの物理的サポート得点」(2 点~10 点), 「友人からの心理的サポート得点」(3 点~15 点), 「友人からの物理的サポート得点」(2 点~10 点) とした。

ソーシャルサポート尺度得点の平均の学年差, 性差

Table 3 登校回避感情尺度の分散分析結果

	F 値		
	性	学年	交互作用
友人関係における孤立感傾向	.39 ns	.43 ns	.35 ns
学校からの離脱感傾向	.60 ns	4.80**	.17 ns
学校に対する疎隔感傾向	.89 ns	1.07 ns	.86 ns

** $p<.01$

Table 4 ソーシャルサポート尺度の得点平均と標準偏差

	1 年生		2 年生		3 年生		分散分析		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	性	学年	交互作用
家族からの心理的サポート	7.61 (1.78)	9.43 (3.46)	7.34 (2.47)	8.78 (2.95)	8.39 (2.97)	9.21 (3.38)	9.36** 男<女	1.04	0.44
家族からの物理的サポート	5.71 (1.39)	6.76 (1.87)	5.63 (1.78)	6.93 (1.96)	6.91 (1.82)	7.68 (2.02)	13.64** 男<女	6.66*	0.34
友人からの心理的サポート	8.11 (2.92)	11.14 (3.64)	7.84 (2.79)	10.59 (2.63)	8.89 (3.14)	10.57 (3.69)	23.20** 男<女	2.97	0.65
友人からの物理的サポート	4.54 (1.68)	5.33 (1.75)	4.41 (1.73)	5.74 (1.62)	5.22 (1.60)	5.54 (1.97)	9.41** 男<女	1.01	1.35

カッコ内は標準偏差

** $p<.01$ * $p<.05$

Table 5 登校回避感情とソーシャルサポートの相関関係

	友人関係孤立感傾向	学校からの離脱感傾向	学校に対する疎隔感傾向
家族からの心理的サポート	-.31**	-.20**	-.26**
家族からの物理的サポート	-.33**	.05 ns	-.10 ns
友人からの心理的サポート	-.45**	-.14 ns	-.21**
友人からの物理的サポート	-.26**	-.01 ns	.02 ns

** $p<.01$

を調べるために, 各サポート得点ごとに学年, 性を要因とする分散分析を行った。Table 4 に平均値, 標準偏差, 分散分析の結果を示す。その結果, 全てのサポートにおいて性の主効果が認められ ($p<.01$), 男子に比べて女子の方が高い値を示した。また, 家族からの物理的サポートにおいては学年の主効果が認められた ($p<.01$)。LSD 法による多重比較の結果, 1 年生や 2 年生に比べて 3 年生が高い値を示した。

3. 登校回避感情とソーシャルサポートの関連

登校回避感情とソーシャルサポートの関係を検討するために, 登校回避感情の各下位尺度と 4 つのサポートとの間の pearson の相関係数を算出した (Table 5)。その結果から「友人関係における孤立感傾向」は, 全ての種類のサポートと有意な負の相関関係にあった (いずれも $p<.01$)。

また, 「学校からの離脱感傾向」と「家族からの心理的サポート」, 「学校に対する疎隔感傾向」と家族, および友人からの心理的サポートとの間に有意な負の相関関係がみられた (いずれも $p<.01$)。

考 察

1. 登校回避感情の因子構造

本研究で用いた登校回避感情尺度は、「友人関係における孤立感傾向」、「学校からの離脱感傾向」、「学校に対する疎隔感傾向」の3下位尺度から構成されていた。また、尺度全体における信頼性係数（ α 係数）は.78であり、十分な内的整合性があると考えられる。

渡辺・小石（2000）の研究では、この尺度は「学校への反発感傾向」、「友人関係における孤立感傾向」、「登校嫌悪感傾向」の3因子が抽出され、本研究とは異なる結果であった。各下位尺度を構成する項目で見ると、「友人関係における孤立感傾向」は本研究とほぼ同じ項目で構成されている。しかし、渡辺・小石の「学校への反発感傾向」に含まれる項目は、本研究では「学校からの離脱感傾向」に、また「登校嫌悪感傾向」に含まれる項目は、「学校からの離脱感傾向」と「学校に対する疎隔感傾向」に分かれた。本研究では渡辺・小石（2000）で使用した項目から、強い登校回避感情を表現した項目（例：学校に対して反発を感じる、学校ではいやなことばかりあると思う、など）を意図的に削除した。森田（1991）によれば、「『反』学校的な対立価値に基づく拒否行動」ととれるほど極端なタイプの不登校は近年あまり見られなくなっている。また、不登校問題に関する調査研究協力者会議がまとめた報告（2003）によると、文部科学省の「学校基本調査」および「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」では、「不安など情緒的混乱」、「学校生活上の影響」、「無気力」など不登校状態が継続している理由別の推移を明らかにしており、理由が複合していていずれが主であるかを決めがたい「複合」の増加を示唆している。一方、「遊び・非行」、「意図的な拒否」などは低い割合で推移している。この結果を反映して、本研究においても登校回避感情を構成しているのは、学校に対する強い反発感や登校嫌悪感ではなく、多くの生徒が経験する一般的な感情であると考えられた。そこで、項目の選定に際し強い感情を表現したものを削除した。このため、渡辺・小石とは因子構造が異なる結果となった

が、信頼性や因子の寄与率から尺度としての使用に耐えうると判断した。

2. 登校回避感情とソーシャルサポートの学年、性別による違い

まず、登校回避感情では「学校からの離脱感傾向」において、1,2年生は3年生よりも離脱感傾向が強いということが明らかにされた。この結果は、1,2年生が3年生より強い離脱感を抱いているというよりもむしろ3年生の離脱感が弱いと考えられる。西野・色川（1998）によれば、中学生の登校への価値観は「勉強に遅れたくないから学校へ行く」、「高校へ行くために学校へ行く」などの「道具的価値」と、「学校へ行くことは当然」などの「規範的価値」からなっている。そして、「道具的価値」において2,3年生の「道具的価値」得点が1年生よりも高いことから、2年生以上になると学校に登校することを進学や進路のためと捉えることを指摘している。これを考慮すると、進学を控えた3年生は、登校することを「受験のため」として捉えているため、学校が嫌だという感情が低いと考えられる。

次に、ソーシャルサポート尺度では、家族からの心理的サポート、家族からの物理的サポート、友人からの心理的サポート、友人からの物理的サポートの全てにおいて、女子の方が男子よりも高いサポート期待を抱えていることが明らかにされた。この結果は、中学生において女子のほうが男子よりサポート期待やサポートに対する満足度が高いとする岡安ら（1993）や、渡辺・小石（2000）の研究結果を支持するものである。岡安ら（1993）によると、中学生女子は男子に比べて、他者に依存することによって学校ストレスを軽減する傾向が強いことが示唆されている。本研究においても、女子のサポート期待は男子より高い可能性が示唆される。

また家族からの物理的サポートは、1,2年生よりも3年生が高いことが明らかにされた。川原（2000）は中学3年生を対象に、高校受験に際して周囲から受けたソーシャルサポートに関する研究を行っている。その結果、親からのサポートでは食事や衣服の気づかいといった「親が自分のために何かしてくれている」

と感じられるものが多く示された。また、兄弟・姉妹が受験勉強を教えてくれたなどの自由記述も見られた。つまり、3年生は苦しい受験勉強の中で家族が提供してくれる物理的サポートを多く受けていると考えられる。公立中学校に通うほとんどの中学生にとって、高校受験は初めて経験する大きな試練である。したがって、子どもが家族にサポートを求める機会や、家族がサポートを与える機会が多くなっている可能性が示唆される。

3. 登校回避感情とソーシャルサポートの関連

登校回避感情とソーシャルサポートとの相関関係を検討したところ、「友人関係における孤立感傾向」と全ての種類のサポートとの間に有意な負の相関関係が認められた。このことから、適応的な友人関係には友人からの心理的・物理的サポートとともに、家族からの心理的・物理的サポートも関わっているといえよう。対人関係の基盤となる家族からの支えを実感することが、より広い対人関係である友人関係に対する肯定的な感情に関与している可能性が考えられる。また、特に友人からの心理的サポートとの相関が高かったことから、友人からの、とりわけ心理面でのサポートを受けているという実感が友人関係への肯定的な感情を高めていると考えられる。

「学校からの離脱感傾向」では、家族からの心理的サポートとの間に有意な負の相関関係がみられた。西野・色川(1998)によれば、学校の魅力の構造は「文化的活動」(文化祭、学級活動など)、「教科外活動」(休み時間、給食時間など)、「保健体育的活動」(体育、運動会など)、「教科活動」(英語、数学など)、「評価的活動」(テスト、部活動など)から構成され、母親、父親からの情緒的サポート期待が高い生徒ほど、これらの活動に意欲的に取り組んでいるという結果が得られた。家族に気持ちを理解してもらえという期待は、中学生にとって精神的な支えとなり、学校活動への意欲を高めたり、学校を楽しいと感じることにつながるのではないだろうか。反対に家族からの心理的サポートを得られない場合は、学校適応に悪影響を及ぼす可能性が示唆される。

「学校に対する疎隔感傾向」では、家族からの心理

的サポート、および友人からの心理的サポートとの間に有意な負の相関が得られた。学校や先生に対する親しみやすさや安心感は、家族や友人に気持ちをわかってもらえることができるという期待と関連があるといえる。共感を受けたり、自己開示を行なうといった内容である心理的なサポート期待が高いということは、他者に対する高い親密性の表れであると考えられる。親密性の高い生徒は学校生活においても、先生や学校に対し親近感を抱く可能性が高いであろう。また、家族や友人からの心理的な支えは、学校に対する全般的なポジティブイメージに関わっていると考えられる。

4. まとめ

本研究の結果から、生徒の登校回避感情と関連しているソーシャルサポートについて考える。

まずサポート源でいえば、家族からのサポートと登校回避感情との間には有意な相関関係が4つ見出されたのに対し、友人からのサポートと登校回避感情との有意な相関関係は3つであった。ここから、家族サポートと友人サポートは、どちらも同程度に登校回避感情と関連していると考えられる。これは、近年の研究で明らかにされてきた、青年期における家族の存在の重要性を示唆するものである。R. J. Havighurst(1972)は、青年期の発達課題の一つに「親や他の大人たちから情緒面で自立すること」をあげている。青年期での対人関係の中心は、これまで依存してきた親から同世代の友人へと移行していき、徐々に自立を成し遂げていくとされる。しかし、ストレスとソーシャルサポートとの関係では、青年期において親のサポートの重要性が低くなっていくとは必ずしも限らず、むしろストレス低減効果は友人サポートよりも家族サポートの方が有効であるという指摘もある(岡安ら、1993、嶋、1994など)。これらの結果から、これまで発達心理学の概念では「心理的離乳」の時期と考えられていた青年期を、あらためて捉えなおす必要があるだろう。

一方で、サポートの機能では、物理的サポートと登校回避感情との間には有意な相関関係が1つしか見出されなかったのに対し、心理的サポートと登校回避感情の間には5つの有意な相関関係が見出された。ここ

から、中学生では物理的サポートより心理的サポートの方が登校回避感情と関連していることが示唆される。これは、各サポートに対する中学生の認知が異なっている可能性が考えられる。つまり中学生がサポートを受けたと感じる場面は、物理的なもののやり取り（例えば金銭の貸し借り）よりも、心理的に支えられた（共感や自己開示を受けた）ときの方が多という可能性がある。また、家族からの物理的サポートはそれ自体当たり前のこととして考えられ、サポートとして捉えられにくいかもしれない。

これらの点から、中学生の登校回避感情の生起を防ぐためには、家族や友人に気持ちを理解してもらえという期待や、必要なときには主に家族から物理的な援助がもらえるという期待が必要であると考えられる。

最後に、本研究の問題点と今後の課題について述べる。

本研究では、登校回避感情とソーシャルサポートの関連のみを検討しており、両者の因果関係までは明らかにしていない。しかし、岡安ら（1993）、嶋（1992）、福岡・橋本（1997）などの先行研究では、共分散分析や階層的重回帰分析により、サポートが心理的健康状態に影響を及ぼすという結果が示唆されている。今後、登校回避感情とストレス緩衝要因と考えられる他の要因、たとえばセルフ・エフィカシーやソーシャルスキルを同時に測定し、その生起過程を明らかにする必要があると考えられる。

また、本研究ではサポート源相互の関係を考慮に入れていない。しかし、たとえば、家族からのサポート期待を得られないために、その補償として友人からのサポート期待が高くなっている場合などは、サポートは必ずしもポジティブな効果を持つとは限らない。この様な点も考慮に入れ、サポートの測定方法をさらに検討する必要がある。

引用文献

- Caplan, G. 1974 *Support systems and community mental health*. New York: Behavioral Publications. 近藤喬一・増野 肇・宮田洋三郎（訳）1979 地域ぐるみの精神衛生 星和書店
- Cohen, S., & Wills, T. A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.
- 福岡欣治・橋本 幸 1995 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係 教育心理学研究, 43, 185-193.
- 福岡欣治・橋本 幸 1997 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, 68 (5), 403-409.
- 不登校問題に関する調査研究協力者会議 2003 今後の不登校への対応の在り方について（報告）
- 久田 満・箕川雅博・千田茂博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み（1）日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.
- 本間友巳 2000 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究, 48, 32-41.
- 川原誠司 2000 中学生の高校受験に際してのソーシャル・サポート—心理的側面への影響に焦点を当てて— 宇都宮大学教育学部紀要, 50, 175-191.
- 森 和代・堀野 緑 1992 児童のソーシャルサポートに関する一研究 教育心理学研究, 40, 402-410.
- 森田洋一 1991 「不登校」現象の社会学 学文社.
- 西野美佐子・色川亜希 1998 中学生の登校規定要因とソーシャルサポートに関する研究 東北福祉大学研究紀要, 23, 87-100.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312.
- 岡安孝弘 1994 学校ストレスと学校不適応 坂野雄二・宮川充司・大野木裕明（編）生活指導と学校カウンセリング ナカニシヤ出版, 76-88.
- R. J. Havighurst 1972 *DEVELOPMENTAL TASKS AND EDUCATION (Third edition)*. David McKay Company Inc 児玉憲典・飯塚裕子（訳）1997 ハヴィガーストの発達課題と教育 生涯発達と人間形成 川島書店
- 嶋 信宏 1991 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究,

39, 440-447.

嶋 信宏 1992 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7, 45-53.

嶋 信宏 1994 高校生のソーシャル・サポート・ネットワークの測定に関する一研究 健康心理学研究, 7, 14-25.

嶋田洋徳 1996 知覚されたソーシャルサポート利用可能性の発達的変化に関する基礎的研究 広島大学総合科学部紀要IV理系編, 22, 115-128.

竹中晃二(編) 1997 子どものためのストレス・マネジメント教育—対症療法から予防措置への転換—

北大路書房.

浦 光博 1992 支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学—サイエンス社.

渡辺弥生・蒲田いずみ 1999 中学生におけるソーシャルサポートとソーシャルスキル—登校児と不登校児の比較—静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇), 49, 337-351.

渡辺葉一・小石寛文 2000 中学生の登校回避感情とその規定要因—ソーシャル・サポートとの関連を中心として—神戸大学発達科学部研究紀要, 8, 1-12.